学 位 記 番 号：　修士第４４号
氏名（本籍）：　中　野　雅　子（香川県）
学 位 の 種 類：　修士（看護学）
学位授与年月日：　平成１５年３月２７日
学位論文題目：　痴呆性高齢者のコミュニケーション活動とＡＤＬの関連

論　文　内　容　要　旨

目的

痴呆性高齢者の日常生活における「コミュニケーション活動」の意味を探究し、日常生活動作の意欲を支える。

方法

老人保健施設に入所中の、60歳から97歳までの男女の痴呆性高齢者56名のコミュニケーション活動を、「入浴」「身支度」「トイレ使用」「移動」「排泄のコントロール」「食事」６場面のうち、「トイレ使用」と「排泄のコントロール」をまとめて１場面とし、５場面で参加観察して１～５（場面数）で評価した。次に日常生活動作（ADL）を10段階・３段階で評価した。更に「改訂長谷川式簡易スケール」を使って知能評価を行なった。

得られたコミュニケーション活動のデータを「高頻度群」「低頻度群」「ゼロ群」に分け、ADLと知能評価の３群間に差がないか、一元配置分散分析による統計解析を行なった。

次に、コミュニケーション活動の評価と知能評価の尺度間の相関をPearsonの積率相関係数で分析した。また更に、言語コミュニケーション評価とADL評価間の関連性をみるために３×３クロス表を作成し、χ^2検定で分析した。

結果

対象者集団は、平均的にみるとADL評価は日常生活において軽度あるいは部分介助を要する、痴呆性高齢者であった。「改訂長谷川式簡易スケール」による知能評価は、「やや高度な痴呆」であった。言語コミュニケーションとADLの関連は、ADL６項目のうち３項目「入浴」「身支度」「食事」に有意な差があった（$p<0.05$）。言語コミュニケーション評価と最も強く相関したのは「食事」であった（r　0.44）。また、言語コミュニケーションの評価（場面数）と知能評価はかなりの正の相関がみられた（r　0.56）。

言語コミュニケーションの頻度による３群と、３段階評価によるADLのクロス

集計とχ^2検定で分析した結果、「食事」のみ有意に関連していた（$p<0.05$）。ADL同士では「食事」が「移動」以外すべての項目と関連していた（$p<0.05$）。

考察

　コミュニケーション活動の頻度によりADLの３項目の評価に有意な差があったことは、より活発なコミュニケーション活動をしている痴呆性高齢者のADLはより高いと言える。この知見は今後のケアに生かすことができると考える。つまり、自らの意思でコミュニケーション活動を行なう高齢者には、関心を示しそれに答え、自ら行なえない痴呆性高齢者には、それを補う対応に意義があると考える。身体と同様に、コミュニケーション活動へのケアもまた、適切に行われることが求められていると考える。

総括

　痴呆性高齢者のコミュニケーション活動を崩壊したものと捉えるのではなく、生活の中で現在も機能している生活道具であると捉え、能動性を支える援助が必要である。